

大堀相馬焼

おおぼりそうまやき

おおぼりそうまやき
大堀相馬焼協同組合
陶芸の杜 おおぼり 二本松工房

福島県二本松市小沢字原1-15-25
電話／0243-2418812
FAX／0243-2418813
URL／<http://www.somayaki.or.jp>



故郷を離れて 守りつづける魂

「浪江町で誇れるものが2つある。大堀相馬焼と高瀬川渓谷だったんだよ」。各窯元の焼物が並ぶ展示室の窓辺には、美しい風景写真が飾られています。みずみずしい新緑や鮮やかな紅葉を映して輝く、清らかな流れ。その地に、いまは足を踏み入れることすらできません。2011年の原発事故からほどなくして、浪江町から避難した住人たち。「20あった窯元も散り散りになってしまっ、いまは福島県内に10軒、福島県外に10軒つとところだな」。理事長の半谷秀辰さんは、大堀相馬焼の陶祖である休閑窯の主。2012年7月に開窯した二本松工房は、ろくろ場や陶芸教室、窯場、製品の展示室など、大堀相馬焼の伝統

を守るとともに、浪江町民をつなぐ拠点にもなっている大切な施設です。「いちばんの問題は釉薬だったな」と半谷さんが語るように、独特の青い色を出していた釉薬は、浪江町の山奥でとれた砥山石とやまいし(を使っていた)が、放射線量が高く、使うことは不可能に。福島県ハイテクプラザに依頼し、7カ月かけて開発した釉薬は、世界中から採取した7種類もの原料からつくられています。「一番の特徴は、『青びび』と呼ばれるびび割れ模様にあって、これは、釉薬と粘土の収縮率が違うために起こるもの。そのときに『貫入音』という、風鈴より澄んだ音が出るんですよ」。長い歴史を誇りながら、新しい魅力を見出し、時代とともに生きてきた国の伝統的工芸品。たとえ浪江町を離れていても、大堀相馬焼を守っていくという決意は固く、揺るぎません。



「323年の歴史の中では、明治維新とか太平洋戦争とか、いろいろ困難があったけれど、先人のみなさんは受け継いできた。で、原発事故が起きたからといって、自分の代で無くしてしまってもいいものか、泣きながら自問自答したこともあった。でも、俺の代でつぶすわけにはいかない。正直、20年30年では帰れないかも知れないけど、ここを窯元や住民みんなが集まる場所にして、がんばっていかうと思っっています」。浪江町への想いが込められた焼物は、手にとるとほどよく重く、あたたかい。

技を尽くして 継承する伝統

- ① 代表的な作風からモダンなデザインまで、窯元ごとに焼物が並ぶ展示室。
- ② ろくろを回し、鮮やかな熟練の技で花器を作陶。
- ③ 相馬藩の御神馬を手描きで筆を走らせると、躍動する「走り駒」が現れた。
- ④ 大きな責任を背負いながら大堀相馬焼を守っていく、理事長の半谷秀辰さん。
- ⑤ 厳しい避難生活の中、二本松市の協力を得て、「陶芸の杜おおぼり 二本松工房」として活動を再開。窯元が共同で使う窯場や陶芸教室、陶芸を体験できる設備もある。



007 二重夫婦湯呑

(夫婦箱入くべア) [税込]2,625円
明治時代に誕生した二重焼。浜千鳥の足跡と言われる穴は、アメリカではハートに見えると言われ、お湯が冷めにくい「アイデアカップ」として人気の的。

